

高岡市埋蔵文化財調査概報 第52冊

# 東木津遺跡 調査概報

——ガソリンスタンドの建設にともなう発掘調査——

2003年7月

高岡市教育委員会

## 序

東木津遺跡は、これまでに行われた発掘調査により、古代においては公的な機関として機能していたことが解明されております。

今回は、高岡市佐野872番地の一角を調査いたしました。過年度における近隣の調査区からは、中枢施設と考えうる据立柱建物群が検出されておりますが、今回の調査区からも、据立柱建物群とみられる遺構が検出されております。

東木津遺跡につきましては、周辺地域の古代史をひもとくうえでも大変重要な遺跡であると考えられます。したがいまして、本書につきましては郷土における歴史研究への第一歩として、意義深いものになると思われます。

なお、この調査につきましては、ガソリンスタンドの建設にともなう事前調査であるため、開発者である株式会社島宇商店からは、多大なご理解とご協力をいただいております。末尾になりますが、心より感謝をいたします。

平成15年7月

高岡市教育委員会  
教育長 細呂木 六良

## 例　　言

1. 本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財の発掘調査概報である。
2. 本書は、ガソリンスタンドの建設にともなう、東木津遺跡の発掘調査の概要報告書である。
3. 当発掘調査は、高岡市教育委員会・株式会社島宇商店・株式会社中部日本鉱業研究所の3者間で協定書をとり交わし、実施したものである。
4. 当発掘調査は、高岡市佐野872番地の一角に対し実施した。
5. 調査関係者は次のとおりである。

高岡市教育委員会 文化財課

課　　長： 大石 城

課長補佐： 天谷隆夫（～平成14年度）

副 主 幹： 本林弘古（平成15年度～）

主 任： 根津明義

株式会社中部日本鉱業研究所

代表取締役社長： 津嶋春秋

考古事業部長： 西井敏夫

主任調査員： 新宅輝久

6. 現地調査は、高岡市教育委員会の指導のもと、株式会社中部日本鉱業研究所が行った。
7. 序章第2項と第四章をそれぞれ高岡市教育委員会とパリノ・サーヴェイ株式会社が執筆し、それ以外の部分については、すべて新宅が担当した。
8. 調査参加者は次のとおりである。（敬称略・五十音順）

### 【現地調査】

石田敏行・上沢智香子・黒田忠明・田中克宏・竹内喜三・谷口幸一郎・馬道弘一  
堀川 肇・増百 晃・福田恵子

### 【室内整理】

阿部陽子・加藤由美子・加治久美・真田恭子・高橋英吏子・新田一喜子・橋真理子  
北川泰子

高岡市埋蔵文化財調査概報 第52冊  
東木津遺跡 調査概報

目 次

序

例言

目次

序 章

遺跡周辺の歴史的環境.....	1
調査にいたる経緯.....	3
調査経過.....	3
基本層序.....	3

第二章 検出遺構

調査区の概要.....	4
掘立柱建物.....	4
土坑.....	12
溝状遺構.....	12

第三章 出土遺物

須恵器.....	16
土師器.....	17
その他.....	17

第四章 自然科学分析 .....24

第五章 総 括 .....26

挿 図

第1図. 遺跡調査区位置図（縮尺1/5,000）.....	1
第2図. 東木津遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1/40,000）.....	2
第3図. 基本層序略図.....	3
第4図. 調査区全体図（縮尺1/200）.....	5
第5図. 掘立柱建物SB1, SB2 遺構平面図及びエレベーション図（縮尺1/40）.....	7
第6図. 掘立柱建物SB3, SB4 遺構平面図及びエレベーション図（縮尺1/60）.....	8
第7図. 掘立柱建物SB5 遺構平面図及びエレベーション図（縮尺1/40）.....	9
第8図. 掘立柱建物SB6 遺構平面図及びエレベーション図（縮尺1/40）.....	10

第9図. 挖立柱建物S B 7 遺構平面図及びエレベーション図（縮尺1/40）	11
第10図. 土坑平面図（縮尺1/120）	13
第11図. 溝状遺構平面図（縮尺1/120）	14
第12図. 溝状遺構S D 1 遺物出土上状況図（縮尺1/40）	15
第13図. 遺構内出土の須恵器実測図（縮尺1/3）	18
第14図. 遺構内及び包含層出土の須恵器実測図（縮尺1/3）	19
第15図. 遺構内出土の土師器実測図（縮尺1/3）	20
第16図. 遺構内及び包含層出土の土師器・木製品・磁石実測図（3001のみ縮尺1/8、他は1/3）	21

#### 表及び挿図版

表1. 遺構内出土の須恵器観察表	22
表2. 遺構内、包含層出土の須恵器観察表	22
表3. 遺構内出土の土師器観察表	23
表4. 遺構内、包含層出土の土師器観察表	23
表5. 木製品観察表	23
表6. 石製品観察表	23
挿図版1. 自然科学分析試料顕微鏡写真	25

#### 図 版

- 図版1. 調査区全景（北から）・第1地区 S D 1 遺物出土状況（南から）
- 図版2. 第2地区 全景（東から）・第3地区 S B 5 完掘（東から）
- 図版3. 第3地区 S B 6 完掘（南から）・第3地区 S B 7 完掘（南から）
- 図版4. S B 5 S P 65柱根出土状況（南から）・S B 6 S P 69礎板出土状況・S K 4 遺物出土状況（南から）
- 図版5. S K 4 完掘（南から）・S D 20 遺物出土状況（南から）・作業風景
- 図版6. 遺構出土須恵器・遺構出土土師器

## 序 章

### 周辺の歴史的環境

東木津遺跡は、小矢部川や祖父川などの浸食によって段丘化した「佐野台地」の縁辺部に位置する。周辺には石塚遺跡や下佐野遺跡をはじめ、石名瀬A遺跡・辻南遺跡・荒見崎北遺跡などといった遺跡がひしめいている。過年度におけるこれら発掘調査成果を参照するならば、当該地域においては、古くは縄文時代後期から人々の暮らしが始まり、以後は若干の空白期間を間にはさむものの、大局的には弥生中期から近現代にいたるまで歴史的様相が継続したと考えられる。

この佐野台地は地形的に東西に二分される。東木津遺跡はこの東側に立地しているが、一方の西側においてはこの遺跡との対比が避けられない遺跡が存在する。中保B遺跡がそれである。この遺跡からは、倉庫群をはじめとする掘立柱建物群のほか、船着場造構やこれにともなう水路などの遺構が検出されており、また、出土遺物においても、暗文土器や帶金具を筆頭に、木簡・転用硯・墨書き土器などといった官衙的色彩をおびるものが出土している。



第1図 遺跡調査区位置図（縮尺1/5,000）（高岡市都市計画基本図 平成10年修正版より）



1. 東木津遺跡 2. 下佐野遺跡 3. 北木津遺跡 4. 西木津遺跡 5. 防防遺跡 6. 西佐野千代遺跡 7. 石名瀬A遺跡 8. 石塚遺跡 9. 石名瀬B遺跡 10. 下北島住吉遺跡 11. 上北島遺跡 12. 石塚江之戸遺跡 13. 石塚五俵田遺跡 14. 石塚納保遺跡 15. 辻遺跡 16. 蔿野町遺跡 17. 稲詰遺跡 18. 中保C遺跡 19. 中保B遺跡

第2図 東木津遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1/40,000）（国土地理院発行地形図より作成）

これらは、概ね8世紀中頃から9世紀代を中心とするものであるが、官衙的施設の存続年代や各構造物のあり方、またそれが担ったであろうと推測されている機能などという点においては、東木津遺跡との共通性が窺われる。その一方では、谷状地形を問にはさんで東西に対峙するという位置関係にあることから、双方の遺跡を対比することによって、東木津遺跡の歴史的様相についても迫れることのできる糸口があるのではないかと考える。

なお、両遺跡の所在する周辺をめぐっては、射水郡と礪波郡を分かつ都界のはか、東大寺領桙田荘が所在したとする意見がある。両遺跡とも、桙田荘が施入される8世紀中頃に造営されたものと考えられており、東木津遺跡にいたっては、莊園もしくは郡衙関連の遺跡から出土する傾向にある種子札木簡や、かつて莊園遺跡を比定する際の大きな根拠の一つとされた「庄」墨書き土器なども出土しているだけに、これらとの関係も見逃せない状況にある。

#### 調査にいたる経緯

今回の調査は、株式会社島宇商店が、高岡市佐野872番地にガソリンスタンドの建設を計画し、埋蔵文化財にかかる照会を寄せてきたことに端を発するものである。当該地は東木津遺跡の包蔵地として周知されていたことから、事前に試掘調査を実施し、この結果をふまえたうえで以後の対応を検討することとした。

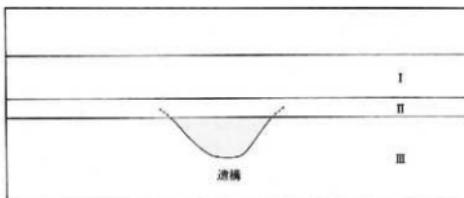
その結果、当該地からは多数の検出物が得られたため、一定の地点においては本調査を行う必要が生じることとなつたが、この件については、突発的に発生したものであったことなどが起因し、その着手にいたるまでには一定の行政的経過をふむ必要があった。

しかし、開発者側からは、平成14年度末にも調査を開始してほしいとの要望が出されたため、開発者と高岡市教育委員会、それに調査委託業者の3者協定のもとに調査を行うことで事態の打開をはかることとし、この合意を得たうえで調査を開始した次第である。

#### 基本層序

今回の調査区では、田面から遺構検出面までの約25cmの厚さの中から、概ね3層に大別しうる層序を確認した。遺構確認面までの土層の堆積が比較的浅いことについては、現況が田畠であったことや、昭和30年代に行われた圃場整備の影響が考えられる。

- 第I層 黒褐色土 20cm 耕作上
- 第II層 黒褐色土 5 cm 遺物包含層
- 第III層 黄褐色土 遺構検出面



第3図 基本層序略図

## 第二章 検出遺構

今回の調査区からは、側柱構造とみられる掘立柱建物7棟（推定）をはじめとする遺構が検出されている。出土遺物については、8世紀後半代から9世紀前半のものが中心であったが、一部に9世紀中葉にまで降ると考えられるものも見受けられており、上記の遺構の存続年代が勘案されるところである。

調査区が矮小なため、掘立柱建物の復元については困難をともなうが、覆土の共通性や柱間の間隔、柱穴の平面形などから、 $3 \times 2$ 間 +  $\alpha$  の側柱構造を呈するものがほとんどであると思われる。したがって、居住空間の機能を有した可能性がある。また、掘立柱建物の多くは第3区で確認されたが、なかには柱穴内に腕木組構造を呈する礎板をもつたものや、柱を据える位置に土壤の強度を強めるための養生がなされていたものが見られた。ちなみに、今回の調査区から検出された掘立柱建物については、「都市計画道地区」で検出された掘立柱建物群と軸方位や建物の規模という点において共通項がある。

また、調査区からは39条の溝状遺構が検出されている。このうちの幾つかは、畝状遺構となりうるものもあるが、概して部分的な検出にとどまり、判断が困難であったことから、本書においてはこれらを「溝状遺構」として扱うこととする。その他、上坑も6基検出されているが、とくに遺構配置などに規格性があるとは思われず、また平面形状についても統一性がない。

### 掘立柱建物 SB 1

第1区の南側で検出した掘立柱建物である。調査区のきわで検出したため全体像は不明である。軸方位は真北から東方へと約30°振る。

SB 1を構成する掘方のうち、SP 6は長軸0.6m×短軸0.5m×深さ0.3mの規模を有している。また、SP 7については長軸0.9m×短軸0.75m×深さ0.34mを測る。掘方の平面形状は、やや不整形ながらも方形を呈している。柱痕等は確認できなかった。図示していないが、土師器壺片などが出土しているため、9世紀前半以降に築造されたことが窺われる。

### 掘立柱建物 SB 2

第1区の中央付近で検出された掘立柱建物である。部分的な検出にとどまることや、各柱穴が攪乱を受けていたことなどが起因し、建物の規模等は不明である。軸方位は真北から東方へと40°振る。

SB 2を構成する掘方としては、柱間の間隔からすればSP 12・SP 13・SP 15が有力と考える。ただし、平面形状から考えるならばSP 15ではなく、SP 14がこれに相応しいようにも思われる。

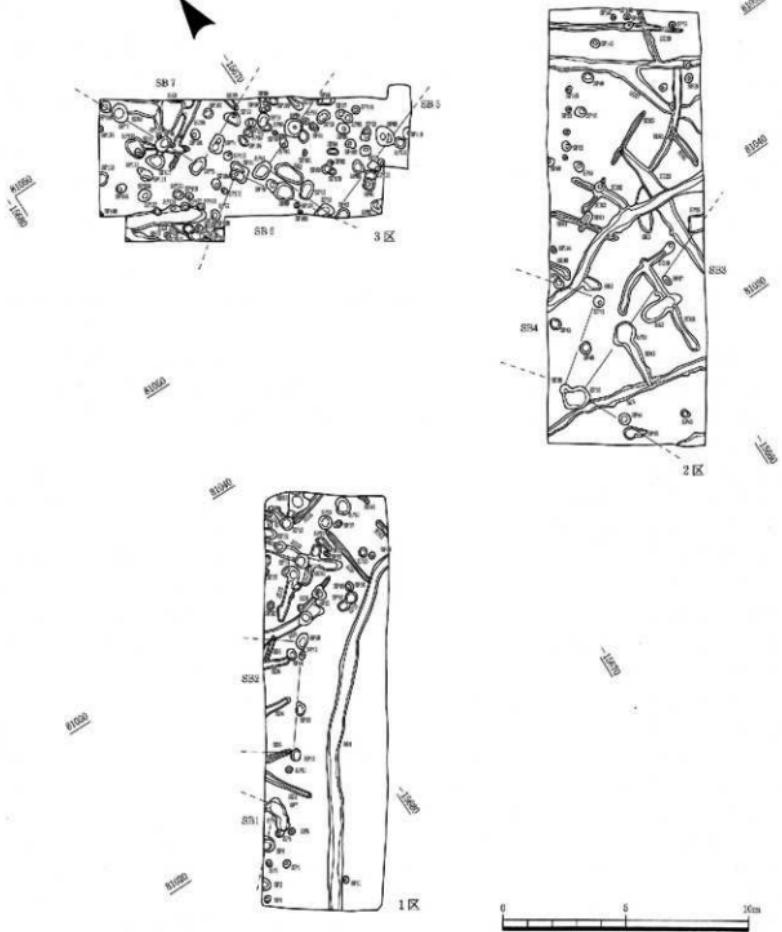
各掘方の平面形状については、SP 12からSP 14までが方形であったが、SP 15は円形を呈していた。

個々の規模は、SP 12が長軸0.5m×短軸0.43m×深さ0.35m、SP 13が長軸0.6m×短軸0.4m×深さ0.27m、SP 14は長軸0.5m×短軸0.37m×深さ0.23m、SP 15は長軸0.33m×短軸0.3m×深さ0.18mである。掘方からは特に柱痕は確認されなかった。SP 12から時期不明の土師器が数点出土している。

### 掘立柱建物 SB 3

第2区の南側で検出したもので、 $3 \times 2$ 間 +  $\alpha$  の規模を呈すると考えた掘立柱建物である。5つの柱穴が該当すると思われるが、後述するSB 4を構成する掘方にこのうちの1つが切られれている。建物の軸方位は真北から東方に60°振る。後世の削平を受けており、一般に北東方向に所在するものほど柱穴の深さが浅くなる傾向にある。

SB 3を構成する掘方は、SP 35・36・37・38・45の計5基である。SP 35は、長軸1.05m×短軸0.85m×深さ0.22m、SP 36は長軸0.95m×短軸0.85m×深さ0.17mを測る。SP 37は長軸0.45m×短軸0.25m×深さ0.13m、SP 38は長軸0.65m×短軸0.6m×深さ0.06mを測る。唯一の平行方向の掘方であるSP 45は、長軸0.95m×短軸0.45m×深さは0.11mであった。SP 35からは時期不明の須恵器や土師器などが出土している。



第4図. 調査区全体図（縮尺1/200）

#### **掘立柱建物 SB 4**

第2区の西側で検出した側柱構造を呈する掘立柱建物である。部分的な検出にとどまったため、全体像までは不明である。

SB 4を構成する掘方としては、SP 39・40・41・42の計4基を確認している。このうち、SP 39は長軸0.45m×短軸0.35m×深さ0.19m、SP 40は長軸0.5m×短軸0.45m×深さ0.1m、SP 41には長軸0.5m×短軸0.45m×深さ0.16mを測る。桁行方向と考えられるものはSP 42のみで、規模は長軸0.45m×短軸0.45m×深さ0.12mである。土層観察においても柱痕は確認できなかった。

柱穴からは須恵器や土師器などが出土しているが、時期は不明である。

#### **掘立柱建物 SB 5**

第3区の東南隅で検出した。一部が調査区外へと広がるため全体像を把握することはできなかったが、3間×2間+ $\alpha$ の側柱構造を呈する掘立柱建物と推測される。

SB 5を構成する掘方としては、SP 60をはじめ、同61・62・63・64・65・66の計7基が該当すると思われる。SP 60は長軸0.9m×短軸0.77m×深さ0.46m、SP 61は長軸0.83m×短軸0.35m×深さ0.32m、SP 62は長軸0.55m×短軸0.4m×深さ0.25m、SP 63は長軸0.8m×短軸0.5m×深さ0.41m、SP 64は、長軸0.85m×短軸0.55m×深さ0.37m、SP 65は長軸1.15m×短軸0.35m×深さ0.38m、SP 66は長軸0.75m×短軸0.23m×深さ0.16cmを測る。

SP 61からは、須恵器（第14図1051）の他、土師器や内黒挽などが出土している。また、SP 65からは柱根が検出されているが、根腐れの防止策ではないかと考えられる白色粘土の痕跡も確認された。

#### **掘立柱建物 SB 6**

第3区の東南隅で検出した掘立柱建物であり、3間×2間+ $\alpha$ の側柱構造を呈するとと思われる。

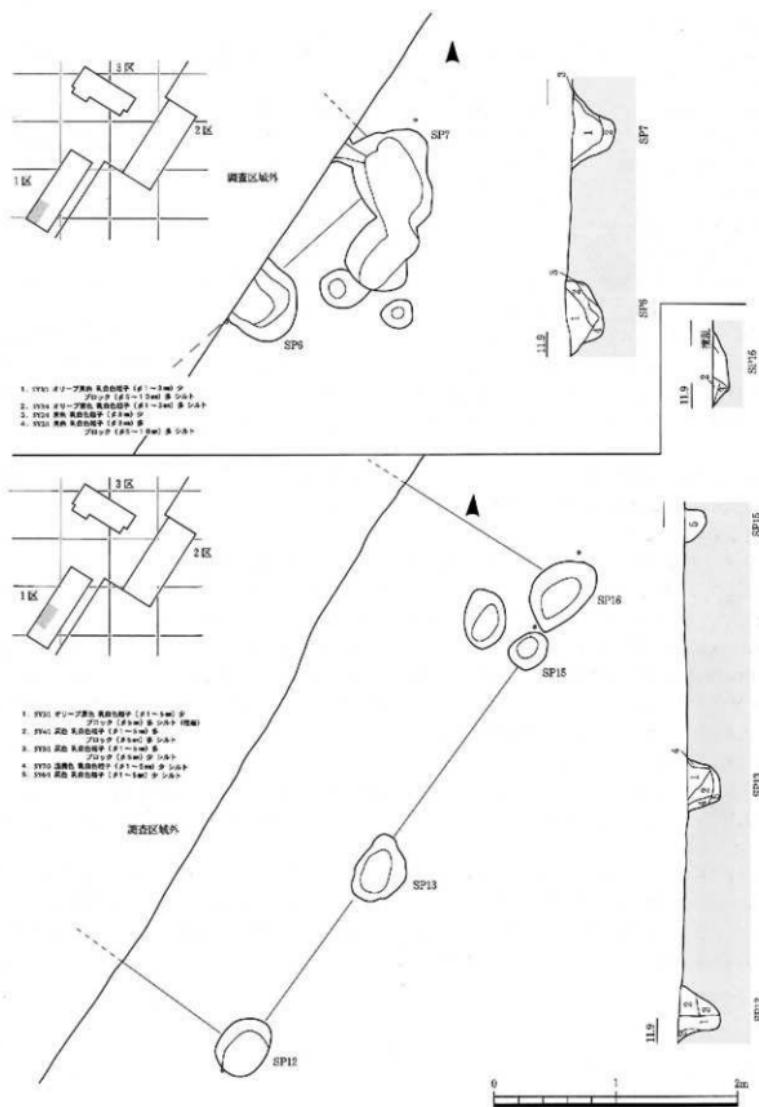
桁行方向の柱間は2.0m前後である。SB 5と近接するため、双方が同時共存した可能性は低いと考えられる。ただし柱根の有無からみて、SB 6はSB 5より先行した可能性があると思われる。

SB 6を構成する柱穴のうち調査区内で確認されたものは、SP 68・69・71・72の計4基である。SP 68は、長軸0.8m×短軸0.55m×深さ0.25m、SP 69は長軸0.77m×短軸0.65m×深さ0.44m、SP 71は長軸0.65m×短軸0.65m×深さ0.34m、SP 72は長軸0.55m×短軸0.35m×深さ0.26mの規模であった。各掘方の平面形は方形であり、土層観察によりSP 69では柱の痕跡も確認されている。

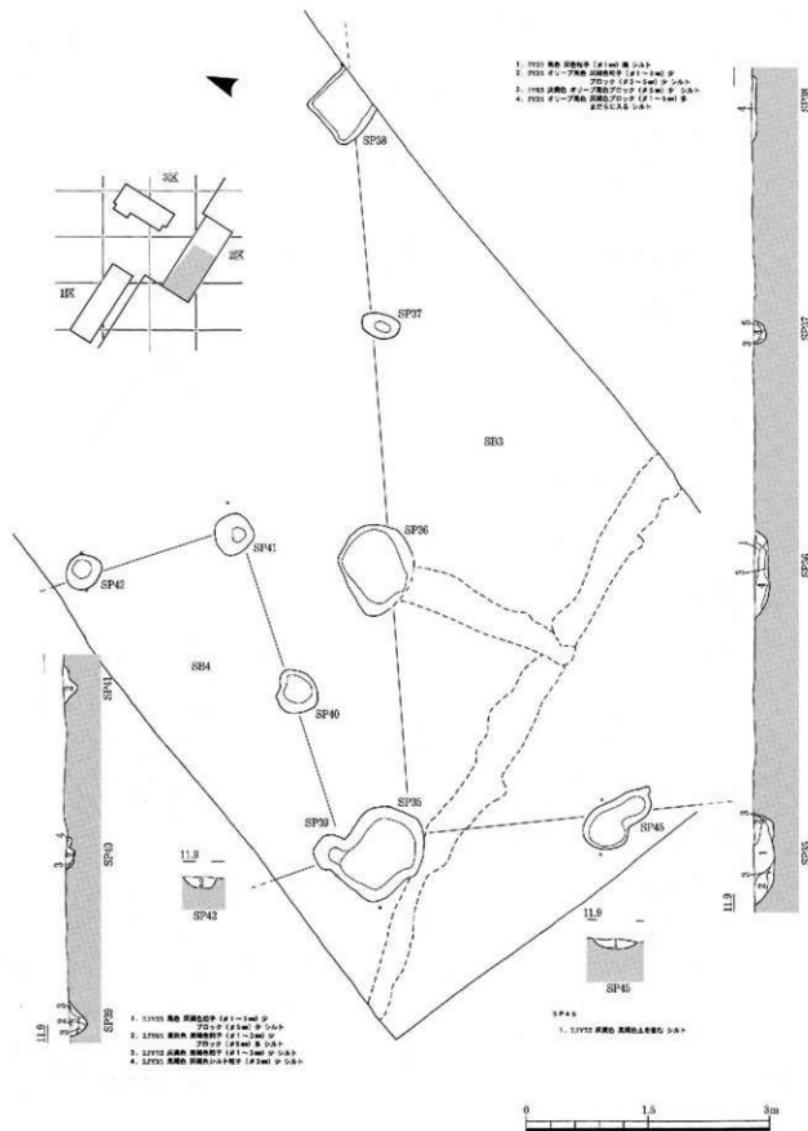
#### **掘立柱建物 SB 7**

第3区の北西隅で検出された掘立柱建物である。一部が調査区外へと広がるもの、3間×2間+ $\alpha$ の規模を呈するとと思われる。桁行方向の掘方は横方向へ段を持つような平面形状を呈し、柱間は梁行方向より短いものであった。

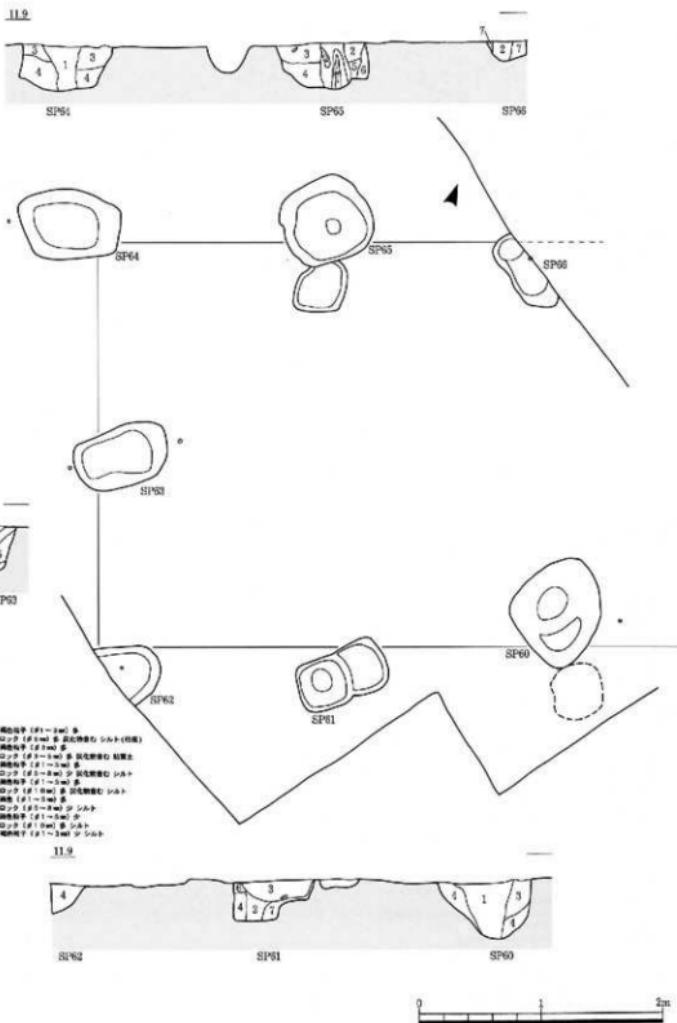
SB 7を構成する掘方のうち調査区内で確認されたものは、SP 73・74・75・76・77の計5基である。SP 73は長軸0.6m×短軸0.45m深さ0.26m、SP 74は長軸0.75m×短軸0.5m×深さ0.18m、SP 75は長軸0.77m×短軸0.43m×深さ0.36m、SP 76は長軸0.65m×短軸0.5m×深さ0.33m、SP 77は長軸0.8m×短軸0.6m×深さ0.3mの規模を有する。SP 75などから柱痕が確認されている。



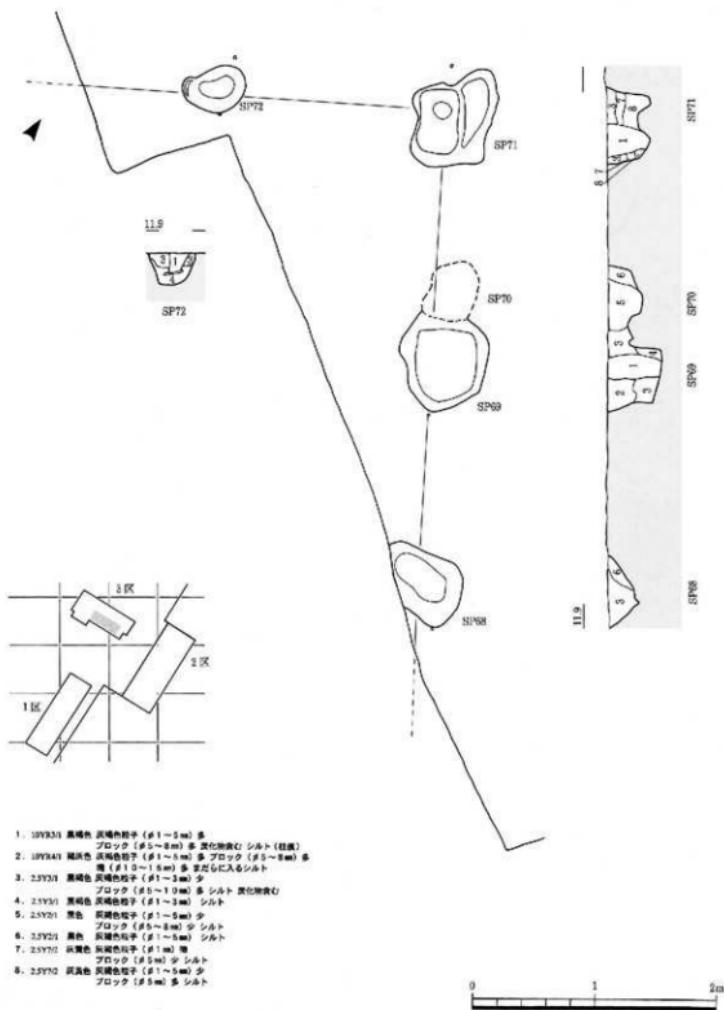
第5図. 振立柱建物SB1, SB2 造構平面図及びエレベーション図 (縮尺1/40)



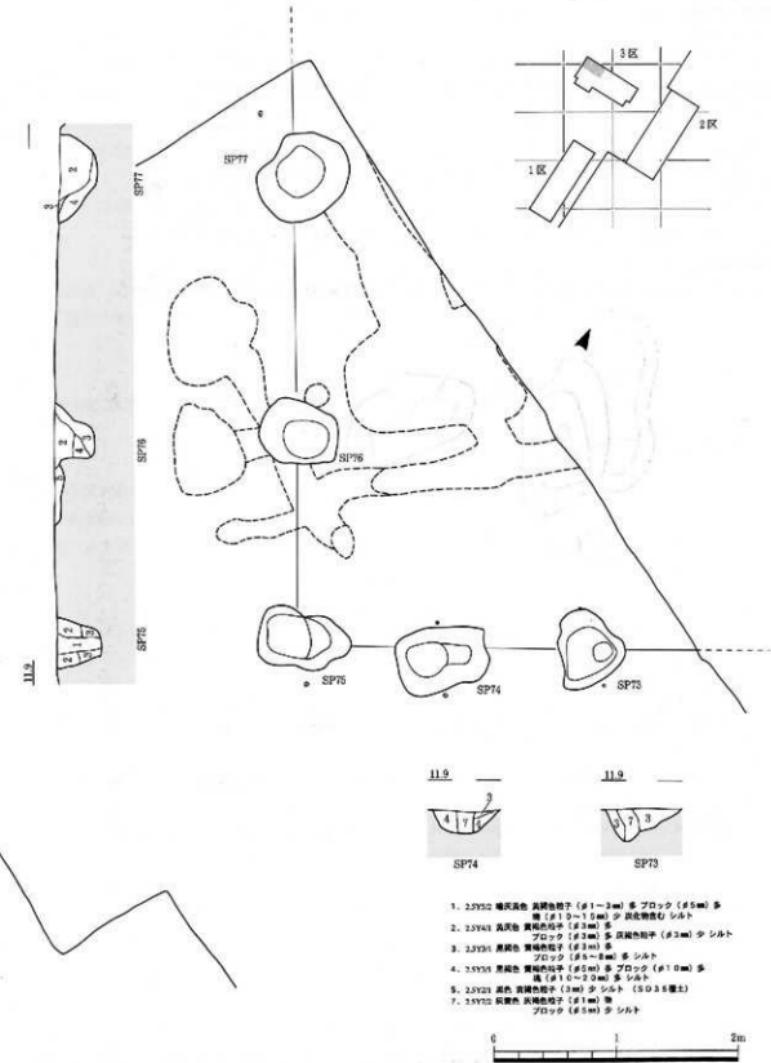
第6図. 摂立柱建物SB3,SB4 造構平面図及びエレベーション図 (縮尺1/60)



第7図. 据立柱建物 S B 5 造構平面図及びエレベーション図 (縮尺1/40)



第8図 墓立柱建物 S B 6 造構平面図及びエレベーション図 (縮尺1/40)



第9図. 据立柱建物SB7 遺構平面図及びエレベーション図 (縮尺1/40)

### **土坑 SK 1**

第2区の中央西側で検出した土坑である。平面形は不整形を呈する。SD20に切られるが、現状では長軸0.8m×短軸0.55m×深さ0.078mの規模を有する。時期不明の土師器片が出土している。

### **土坑 SK 2**

第2区の中央付近で検出した土坑である。平面形は方形である。長軸1.8m×短軸0.65m×深さ0.226mの規模を有する。上記のSK1とは相違し、SD20に切られる。時期不明の須恵器や土師器片が出土している。

### **土坑 SK 3**

第2区の中央付近で検出された土坑である。SD18を切る。長軸1.85m×短軸0.6m×深さ0.103mという規模を有する。時期不明の須恵器や土師器片が出土している。

### **土坑 SK 4**

第3区の南西隅で検出した土坑である。SD37に切られるが、平面形は方形を呈する。長軸3.25m×短軸0.7m×深さ0.251mという規模を有する。遺構底面よりやや浮いた状態で第13図から第16図に掲載した須恵器环片や土師器などが出土している。

### **土坑 SK 5**

第3区の中央付近で検出した土坑である。平面形状は方形である。規模は長軸1.3m×短軸0.6m×深さ0.139mを測る。特に遺物の出土がなかったため存続時期などは不明である。

### **土坑 SK 6**

第3区の北西隅で検出した土坑である。SD36を切り、やや不整形ではあるが、平面形は方形を呈する。西側の一部にやや広いテラス状の段を設け、その部分から直線的に遺構底面へ降りていくという形状を呈する。規模は長軸1.3m×短軸0.8m×深さ0.422mを測り、「鳥字地区」の土坑の中では最も深い掘込みをもつ。遺物の出土はない。

### **溝状遺構**

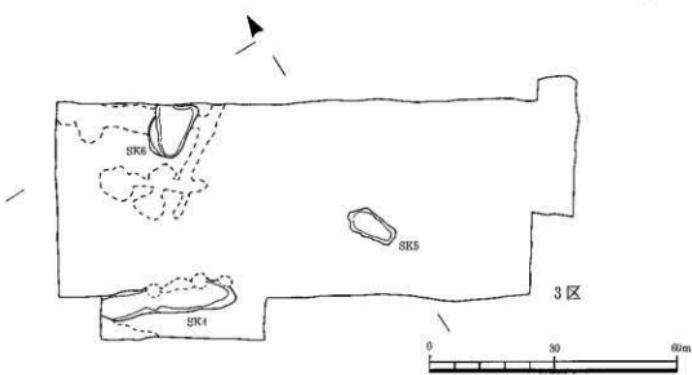
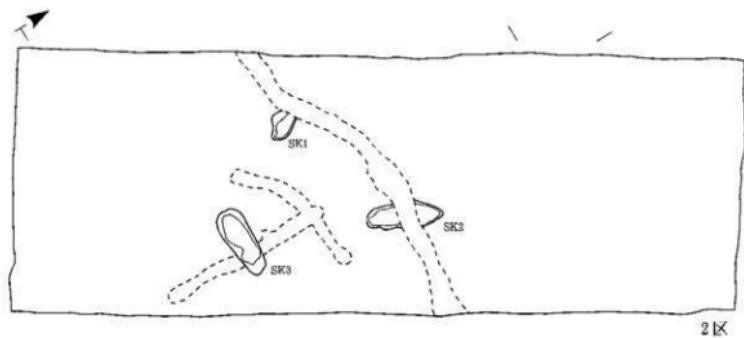
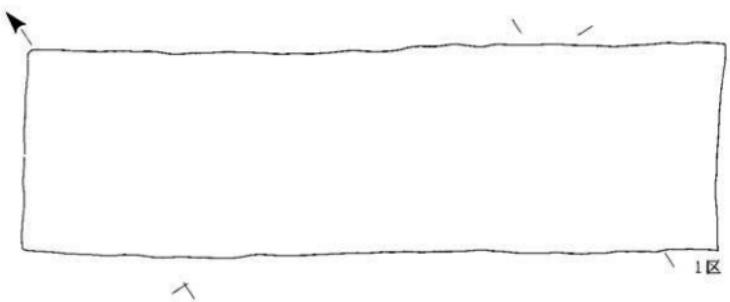
今回の調査区からは合計39条の溝状遺構を検出している。多くが部分的な検出にとどまったため、その全容はおろか、周辺の遺構との関連などを把握することはできなかった。なかには周辺の溝とセットをなし、本来は歯状遺構として機能したものもあるかと思われるが、上記のような事情から、本書においては最大公約数的にこれらを全て「溝状遺構」として扱うこととする。

このうち、第1区と第2区にまたがって検出したSD1については、遺構の全体像が把握できた数少ない例である。第12図にもその一部を示したように、出土遺物が多く、規模は幅0.5m前後、深さ0.3mを測る。第1区を南北方向に湾曲しながら横断し、第2区では東西方向に角度をかえる。

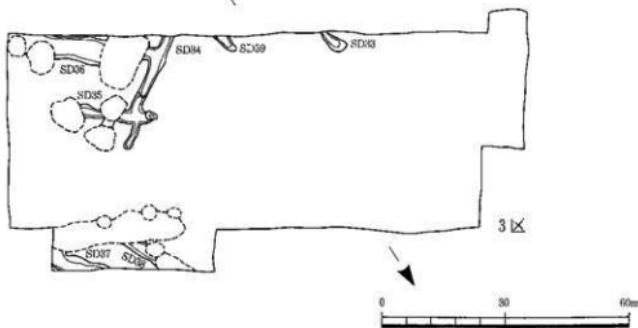
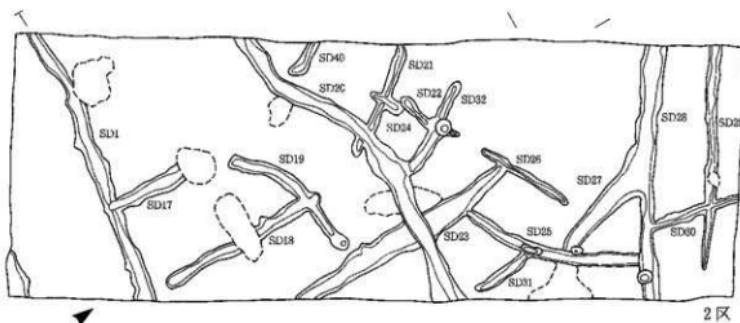
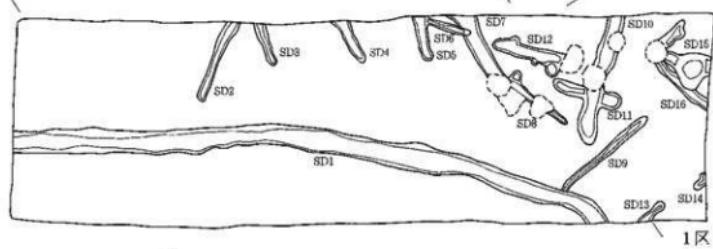
須恵器の环A・环B・蓋・甕・壺、墨痕のある环Bや土師器の罐などが出土した。

第2区では、SD20が調査区の中央を斜めに横断している。他の溝状遺構が本址に対して直交するように位置している。幅0.6m前後、深さ0.3mほどの規模であったが、他の溝状遺構が溝幅にバラつきがみられるのに対し、SD20はほぼ均一であった。

なお、全調査区から検出された溝状遺構を概観するならば、SD1を除いて、出土遺物が少ないと傾向がみられた。とはいっても、掘立柱建物の柱穴から出土した遺物とは、時期的に大きな隔たりはないと思われる。

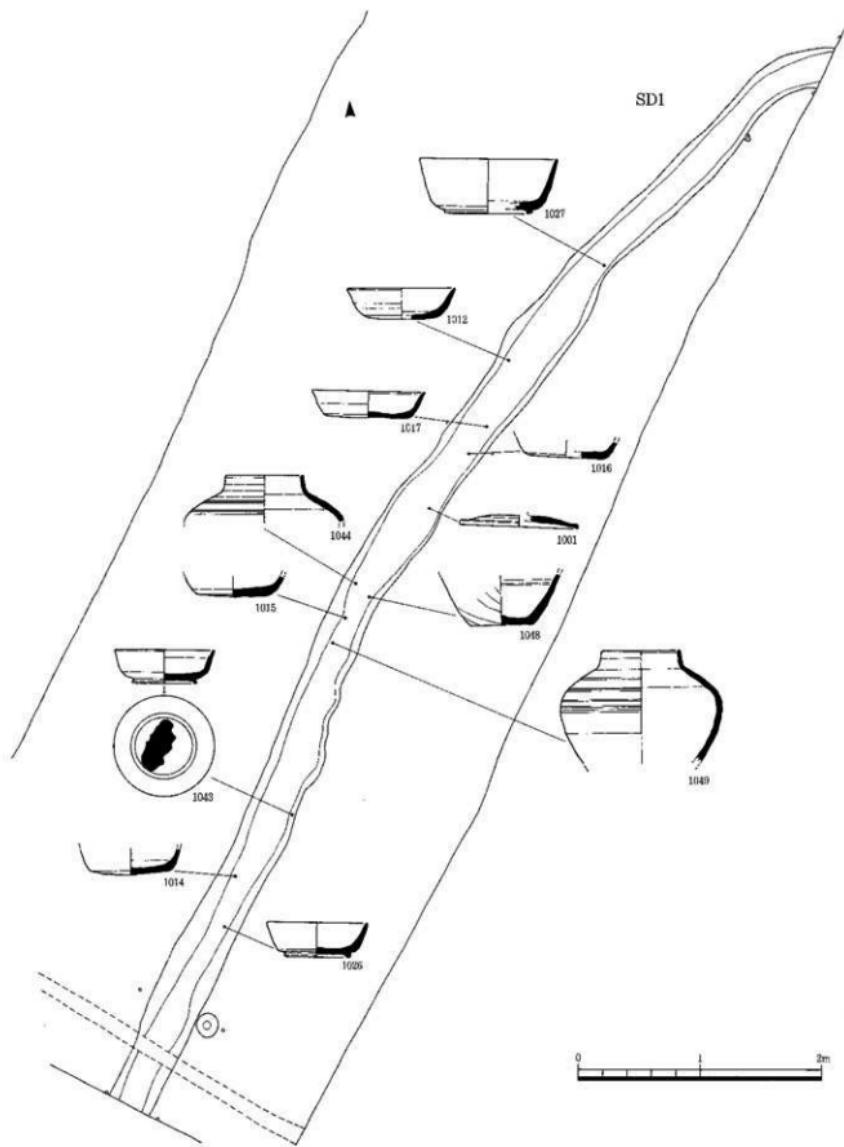


第10図. 土坑平面図 (縮尺1/120)



0 30 60m

第11図. 溝状遺構平面図 (縮尺1/120)



第12図. 溝状遺構 S D 1 遺物出土状況図 (縮尺1/40)

### 第三章 出土遺物

#### 須恵器

須恵器については、SD 1とSK 4から多く出土した。器種としては壺A・壺B・蓋などといった食膳具の他、貯蔵具も出土している。時期的にはやや新しいものも見られるが、他の調査区と同様に8世紀後半から9世紀前半にかけてのものが多く出土する傾向にある。

なお、本書においては遺構内から出土した遺物を中心に解説を加えていくこととする。

##### S D 1出土の須恵器（第13図-1001, 1002, 1009~1017, 1026, 1027, 1043~1045, 1048~1050）

SD 1からは蓋・壺A・壺Bなどの食膳具の他、鉢類や短頸壺といった貯蔵具が出土した。また壺Bの底外面に墨痕が存在するものもみられた。

壺Aは、口縁部が内湾気味に立ち上がりつつ口唇部付近でやや外反していくものと、口縁部が直線的に立ち上がるものが見られる。1027を除く壺Bについては、上記したうちの前者に属する。また、法量についても多くの口径12cm内外のものであったが、1027は比較的大型の部類に属し、口径は約16cmを測る。蓋は、頂部が扁平なものと僅かに傾斜するものとに二分される。頂部の外面はロクロヘラケズリとロクロナデによって調整が加えられている。端部については、低くやや丸みを持たせて内傾するものと、丸みを持たせるものの2種類がみられた。短頸壺は2点出土し、肩部と胴部上位に沈線を巡らし、口縁端部はやや厚い作りであった。他に瓶類や甕の破片などを確認している。

##### S D 10出土の須恵器（第13図-1029）

S D 10からは少量の須恵器が出土している。1029はSD 10で出土した壺Bである。高台と底部の間にやや間隔をおき、口縁部は内湾気味に立ちあがりつつ、その中位でやや外反する。また、高台はやや外反し接地する。

##### S D 20出土の須恵器（第14図-1003, 1030, 1031）

1035はSD 20から出土した壺Bである。1029と同様に、口縁部は内湾気味に立ちあがりつつ、その中位でやや外反するが、高台はやや内斜して接地する。

##### S D 37出土の須恵器（第13図-1004, 1005）

S D 37からは、蓋と壺Aが出土している。1005の蓋は頂部がわずかに傾斜し、調整はロクロナデとロクロヘラケズリで、端部は内側に緩やかな平坦面を作り出したものである。

##### S K 4出土の須恵器（第13図-1006, 1018~1021, 1032）

SK 4からは蓋・壺A・壺B・稜挽が出土している。1006の蓋は頂部がやや傾斜し、端部はやや丸みをもつ。壺Aについては、底部から口縁にかけて緩やかな曲線を描きながら端部に至る1018と、直線的に立ち上がる1020との2種類がみられる。壺Bについては、高台が内側に寄り、体部は口縁端部へ緩やかな曲線を描きながら立ち上がる。1021の稜挽は、口縁部のみの出土であるが、体部下半部にロクロヘラケズリによる調整がなされている。

##### 柱穴出土の須恵器（第13図-1007, 1008, 1022~1025, 1033, 1046, 1051, 1053）

柱穴から出土した遺物については、掘立柱建物の築造年代を勘定するための資料となるため注目される。

1024はSB 6を構成するSP 71から出土した壺Aである。器高は浅く、器厚はやや底部に厚みを持つ。9世紀の中頃かと思われる。

1025はSB 7を構成するSP 76から出土した壺Aである。口縁部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底部は一部欠損しているもののロクロヘラ切りである。9世紀前半のものと考えられる。

## 土師器

今回の調査区からは、内面黒色土器碗や上師器环をはじめ、皿・甕・壺・瓶などが出土している。土師器に関しては、須恵器に比べて完形に近いものが少なく、全容がわかるものが少ない。時期的には8世紀末から9世紀前半のものが中心であり、それ以降のものは少量が見受けられる程度である。

なお、前述の須恵器と同様に、ここでは遺構から出土した土師器を中心に解説を加えていくこととした。

### 内面黒色土器（第15図－2001～2005）

今回の調査区から出土した内面黒色土器は、内面のみ黒色研磨を施したものばかりである。内面のミガキ調整は横方向へ施すものを基本とするが、一部のものはこれに斜め方向への調整を加えるものを見られる。底部が残存していないものが多いことから、底部周辺へのヘラケズリ調節の有無などは不明なものが多いが、少量の遺物を対象に観察を行うならば、回転糸切り痕が未調整のものと、ヘラ切り離しが行われたものが混在している。

### 坏・皿（第15図－2006～2011）

土師器の坏については、すべて細片であったが、口径は12.2cmから13.0cmまでのものがみられる。手持ちヘラケズリの有無は確認できなかった。一部に赤彩が施されたものがある。皿は口縁部のみの出土であるため、時期特定にいたるほどの明確な根拠に乏しい。口縁端部はやや尖り気味である。

### 甕・瓶（第15図－2012～2015、2017～2020 第16図－2022、2023、2025～2030）

2023以外はすべて甕である。このうち2014については口縁部をやや丸くおさめ、内面はカキメを施している。2019は口縁部の端部を巻き込む形状を呈する。胴上半部の外面にはカキメが施されており、内面にも単位のやや広いカキメが残る。時期は9世紀中頃のものと考えられる。2020は小型甕の底部である。胴下半部の外面にはヘラケズリ痕がからうじて確認され、内面にはハケメが残る。また、胴下半部には一条の沈線が巡る。

2023は瓶の口縁部である。口縁部周辺には、張り付けによる突帯が巡り、体部外面にはカキメが施されている。

## その他

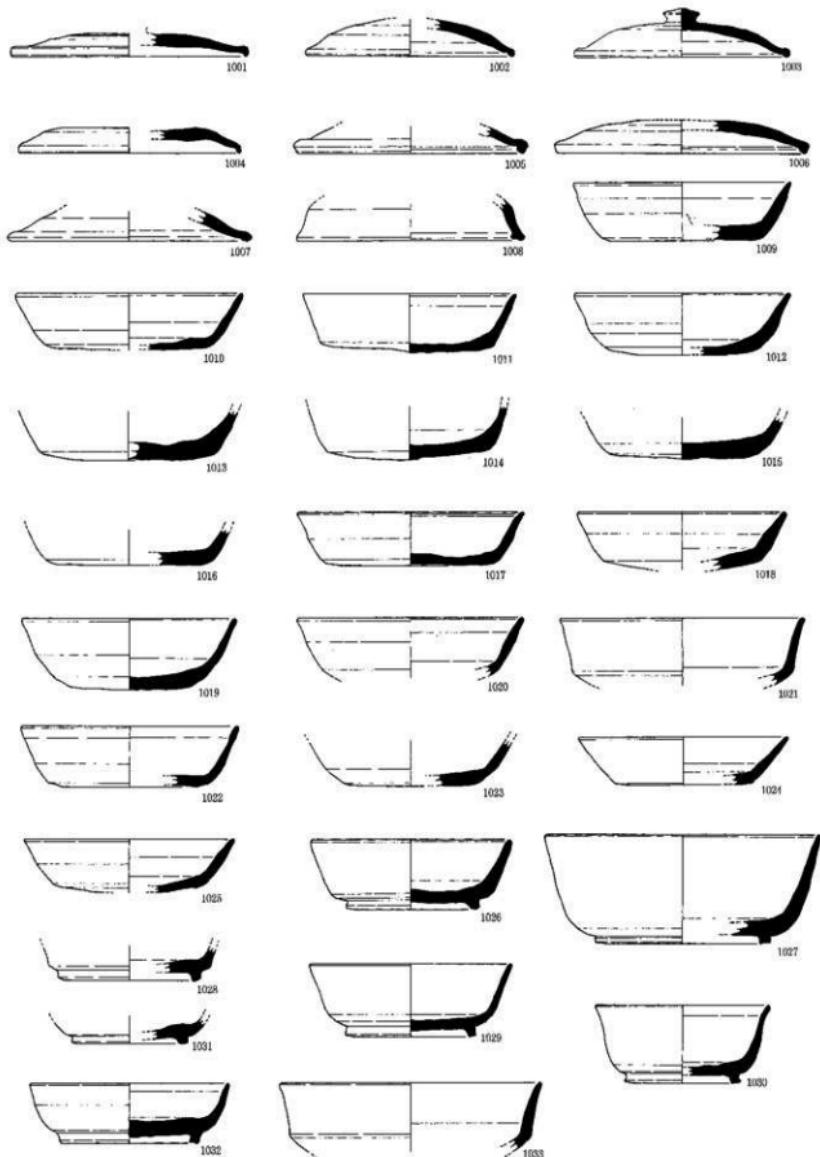
### 柱根および礎板（第16図－3001～3003）

3001は柱根で、S B 5を構成するS P 65から出土した。全長38.4cm・径18.7cmを測り、木口には伐採時の刃先痕が残るほか、側面にも調整時の加工痕がみられた。3002・3003は礎板で、3002はS B 5を構成するS P 61、3003はS B 6を構成するS P 69から出土した。S P 69からはもう1枚出土している。遺存状態が芳しくないため、加工痕などは確認できなかった。

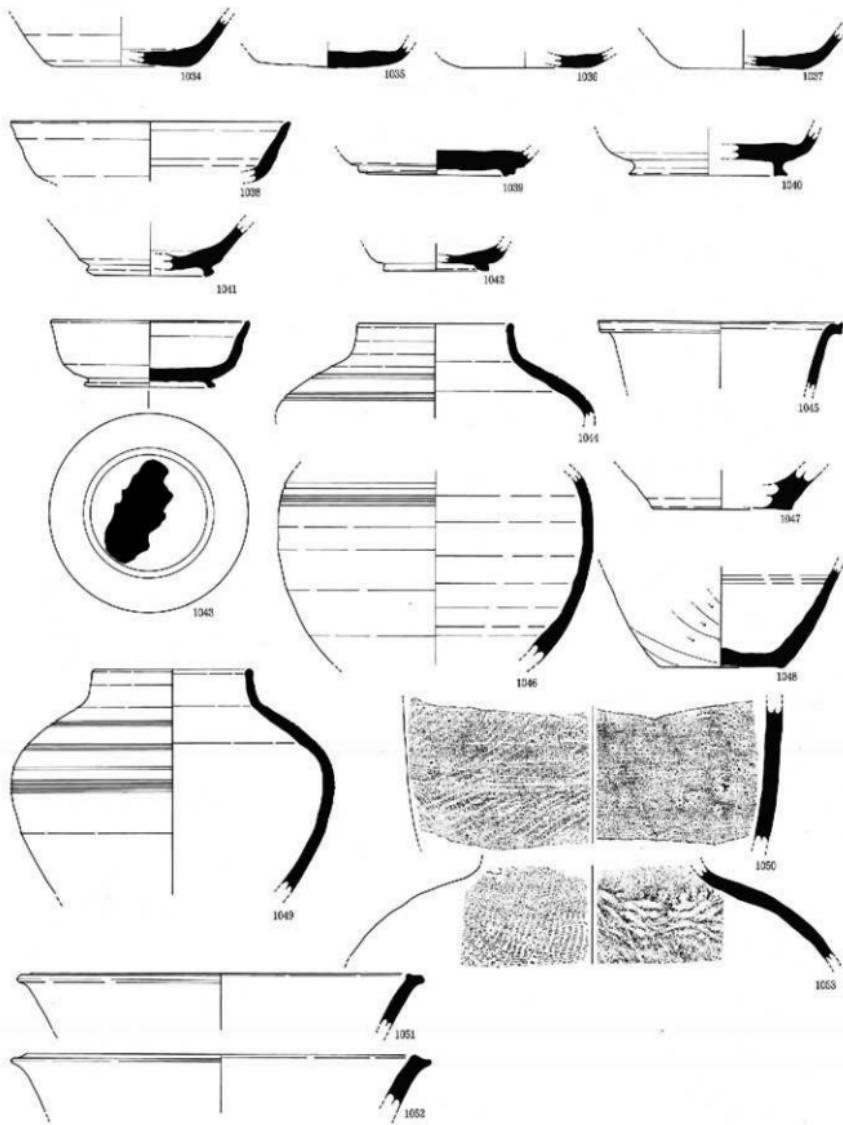
### 転用硯（第14図－1043）

今回の調査区からは、転用硯が1点出土している。底外面に墨痕が確認されたほか、全面的に磨耗がみられる。9世紀前半代のものである。

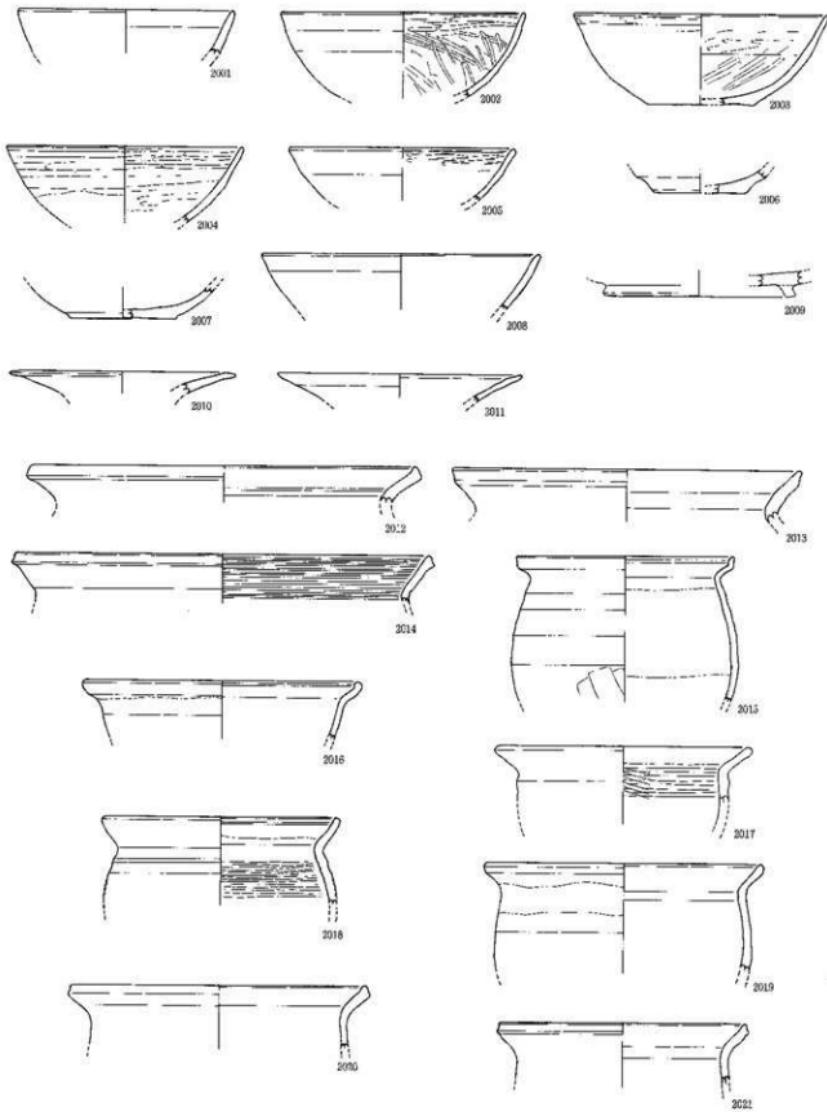
東木津遺跡全体では、転用硯のほかにも幾何学文や人面、あるいは則天文字風の刻書をもつ円面硯が多数出土している。8世紀後半代から9世紀前半代までのものが多数を占めるため、その時期に文書活動が行われていたものと考えられる。また、当調査区から転用硯が出土したことについては、そうした活動が当該地にも及んでいた可能性があると思われる。



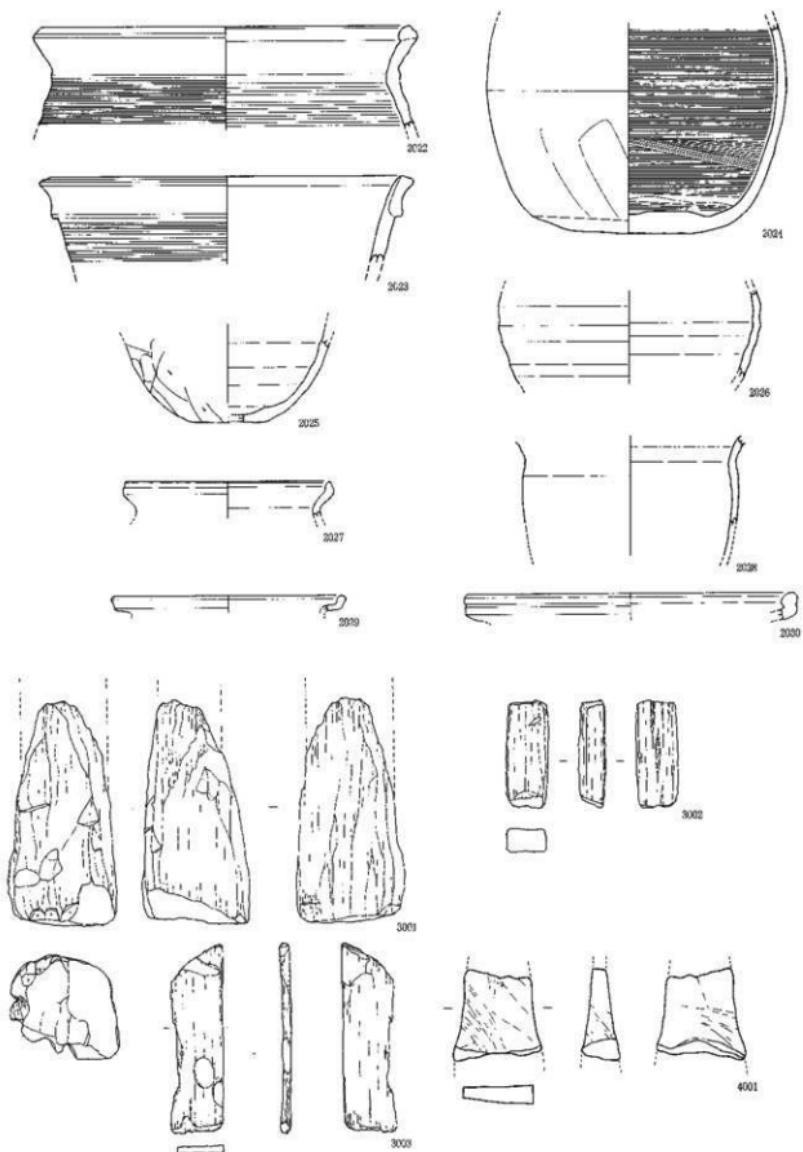
第13図、遺構内出土の須恵器実測図（縮尺1/3）



第14図 造構内及び包含層出土の須恵器実測図（縮尺1/3）



第16図 遺構内出土の土師器実測図 (縮尺1/3)



第16図 造様内及び包含層出土の土師器・木製品・玉石実測図 (3001のみ縮尺1/8、他は1/3)

遺構内出土の須恵器調査表

1

表2 遺構内・包含層出土の須恵器・銀器・漆器

清掃内出士の土師器調査

卷之四 漢書內句全圖出七十種器物表

( )

卷之六 石制器皿家

圆环 耳带	中耳膜	舌形	鱼鳞 (cm)	鳞片 (cm)	鱼体 (cm)
4937	SPII	链石	6.5	6.5	1

- 93 -

## 第四章 自然科学分析

### 東木津遺跡から出土した柱根の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

東木津遺跡では、8世紀後半から9世紀中葉を中心とする遺構や遺物が検出されている。本稿では、同遺跡島宇地区で検出された柱穴P65における柱根をもって、この遺構の構築時期を検討するべく、柱根の放射性炭素年代測定を行うとともに、この遺物の樹種同定を行うこととする。

#### 概要

##### 1. 試料

試料は、島宇地区の柱穴P65から出土した柱根1点である。

##### 2. 方法

###### (1). 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所（IAA）の協力を得た。

###### (2). 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアガム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

#### 結果

結果を表1に示す。同定されたモクレン属の主な解剖学的特徴を以下に記す。

##### ・モクレン属 (Magnolia) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った梢円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞壁、1～40細胞高。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

地区	遺構	用途	材質	樹種	測定年代	$\delta^{13}\text{C}$	補正年代	Code No.
島宇地区	P65	柱根	生木	モクレン属	1200±30BP	26.18±0.58‰	1180±30BP	IAAA-30644

1)年代測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。

2)測定年代は、1950年を基準とした年数で、補正年代は  $\delta^{13}\text{C}$  の値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。

3)放射性炭素の半減期は5568年を使用した。

#### 考察

今回得られた補正年代からINTCAL98による曆年校正を行うと、cal AD782-791,809-845,846-891となる。このことから、柱根の年代は8世紀末～9世紀代が推定される。この分析結果は、これまでに考えられてきた東木津遺跡の存続期間内とも適応すると考えられる。

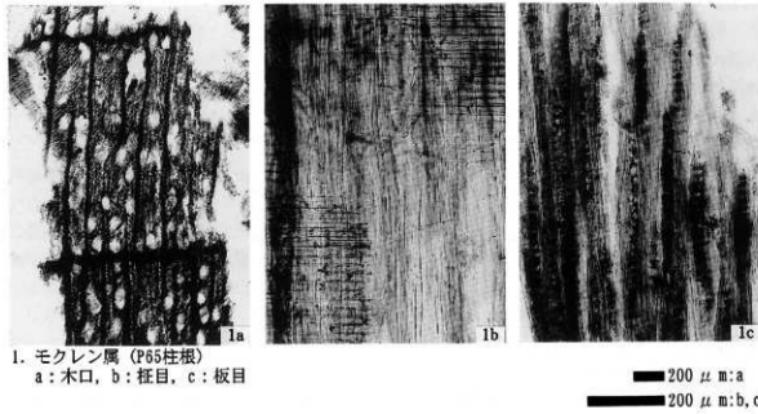
一方、モクレン属のうち、本地域で最も普通にみられるホオノキは、軽軟であるが割れ狂い等の欠点が少なく、表面の仕上げも良いとされる(平井, 1979)。これらの点が柱材として利用された背景に考えられる。

なお、本地域では、柱材としてはクリの利用が多く見られることから、今後建物の規模・性格等も含めてクリ

やモクレン属の利用状況について検討したい。

【引用文献】

- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.  
平井信二 (1979) 木の事典 第1巻. かなえ書房.



挿図版1 自然科学分析試料顕微鏡写真

## 第五章 総 括

東木津遺跡（島宇地区）における発掘調査では、掘立柱建物を7棟確認した。同遺跡では、過年度において24回の発掘調査が実施され、総計20棟の掘立柱建物が確認されている。今回追加された7棟については、これらとほぼ同じ軸方位をもつことから、双方には規格という点で共通項のあった可能性がある。

東木津遺跡から検出された建物のほとんどは側柱構造を呈する。また建物配置では特に「コ字形」や「品字形」を呈していないことから、類例的には官衙と断定するには弱い。しかし、上記したように、その建設にあたっては一定の規格性があった可能性があり、また、周辺からは木簡や漆紙文書、あるいは墨書き土器などといった豊富な文字資料の出土があったことから、一般集落との隔絶性があることは明らかであり、何らかのかたちで官衙的な様相を呈していたと考えてよい。

なお、周辺地域に対する従来までの研究成果を参照するならば、この地域については、古代莊園との対比が避けられないところがある。東木津遺跡では、いまのところ莊園もしくは官衙関連の遺跡から出土する傾向にある種子札木簡の他、1点のみではあるが「庄」墨書きも出土しており、確かにこれらの遺物との対比を行ってみるのも一案であろう。ただし、東木津遺跡の歴史的性格を追究するに際しては、掘立柱建物群の考察からアプローチを試みる必要があるとも考える。

掘立柱建物を中心とする集落遺跡としては、富山県内では中保B遺跡をはじめ、任海宮田遺跡、水橋荒町辻ヶ堂遺跡、水橋二杉遺跡、じょうべのま遺跡、高瀬遺跡などといった遺跡があげられる。このうち、じょうべのま遺跡と高瀬遺跡を除く諸遺跡においては、東木津遺跡と同様に「コ字形」や「品字形」を呈する建物配置が見受けられていないものの、その歴史的性格をめぐっては、官衙別院、開発集落、駅家、荘所などといった諸機関に比定する意見がある。東木津遺跡についても、これらとの共通性や対比などから検討を加え、そのなかから具体的な施設を割り出していくのも一案ではないかと思われる。

### 【引用・参考文献】

- 金田章裕『古代莊園図と景観』東京大学出版会 1998  
鈴木景二『越中における古代莊園図の研究』『富山史壇』27 1963  
高岡市教育委員会『中保B遺跡調査報告』2002  
高岡市教育委員会『石塚遺跡・東木津遺跡発掘調査報告』2001  
藤井一三『東大寺開田図の研究』瑞書房 1997  
山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』瑞吉房 1996  
和田一郎『越中の東大寺耕田』『高岡市史 上巻』1959

写 真 図 版



調査区全景（北から）



第1地区 SD1遺物出土状況（南から）



第2地区 全景（東から）



第3地区 SB 5 完掘（東から）



第3地区 SB 6完掘（南から）



第3地区 SB 7完掘（南から）



S B 5 S P 65柱根出土状況（南から）



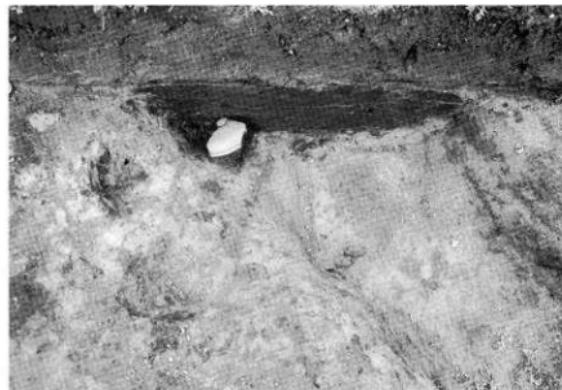
S B 6 S P 69礎板出土状況



S K 4 遺物出土状況（南から）



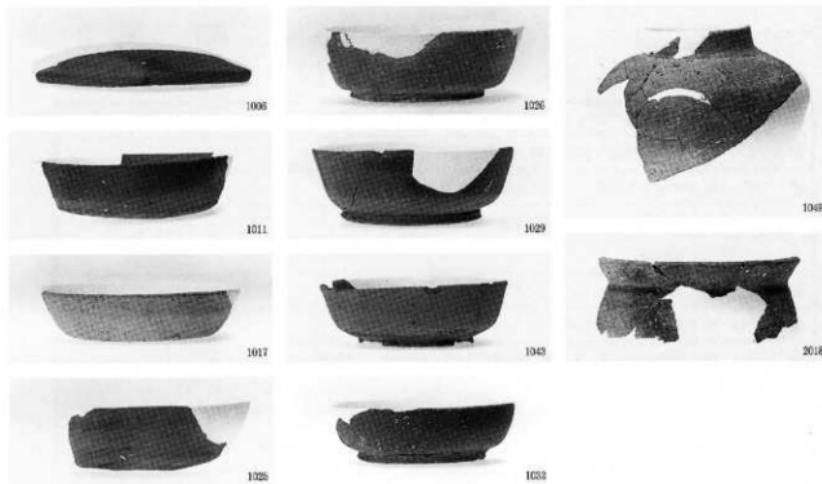
SK 4 完振（南から）



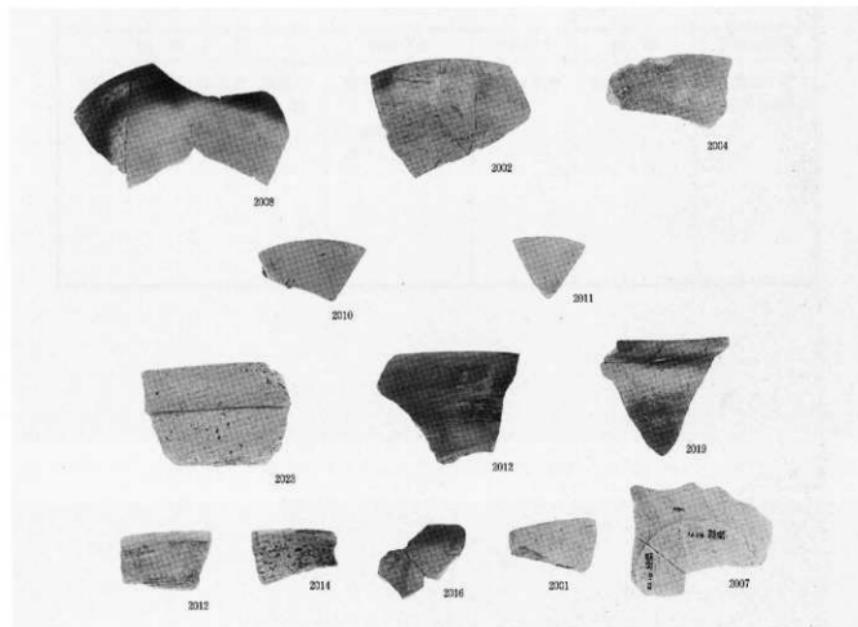
SD 20 遺物出土状況（南から）



作業風景



造構出土須惠器



造構出土土師器

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしきづいせき ちょうさがいほう							
書名	東木津遺跡 調査概報							
副書名	ガソリンスタンドの建設にともなう発掘調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第52回							
編著者名	新宅 輝久							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 TEL0766-20-1463							
発行年月日	西暦2003年7月11日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東木津遺跡 (島字地区)	富山県高岡市 佐野872番地	01602	202135	36° 43' 49"	136° 59' 28"	20030317 20030711	250.29m <sup>2</sup>	ガソリンス タンドの建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
東木津遺跡 (島字地区)	官衙及び集落	奈良・平安	掘立柱建物7棟 土坑6基 溝状遺構37条 その他ピット群				土師器、須恵器、黑色土器、転用 鏡、砥石、柱根、礎板	

---

高岡市埋蔵文化財調査概報 第52冊

**東木津遺跡 調査概報**

——ガソリンスタンドの建設とともに発掘調査——

発行者 高岡市教育委員会  
富山県高岡市広小路7番50号

2003年7月11日

印刷所 株式会社富山フォーム印刷  
富山県富山市黒崎173番1

---